一般財団法人 東京私立中学高等学校協会　東京私学教育研究所
芸術体育系教科研究会（書道）会報
書道会報
2024.3 発行

委員長あいさつ
「書道所感」

東京音楽大学　川上　裕美子

新年元旦の能登半島を中心とした北陸地方の大震災は、新年賀詞を述べることを躊躇してしまうほどの衝撃的な令和六年の幕開けでした。

北陸地方は日々の営みの中で、日本古来の文化や芸術を大切に守り、伝統を継承する人財を育んできています。被災された地域に思いを寄せ、一日も早く平常を取り戻されることを願うばかりです。

さて昨年末に、こちらも衝撃的な見出しが目に留まりました。「ああ、ついにここまで来たか」というのが率直な気持ちでした。

≪「弘法の筆」AI で再現≫という記事は、平安時代の能書家で、「三筆」と称される弘法大師空海の筆遣いを、人工知能（AI）で再現することに香川大学が成功した、と伝え、「書道文化に光」と副題を付し、日常生活で書道文化に触れる機会が減少している現代において、AI の面白さを介して書道の素晴らしさが再認識されればよいと、「人×テクノロジー」の次なる進化に期待が広がることに言及しています。

研究過程では、現存する空海の史料を二つの AI に学習させ競わせる、「GAN（敵対的生成ネットワーク）」という手法を採用しており、一方が空海の書跡に近い文字を生成し、もう一方が精度の判定を繰り返すことで、次第に空海の筆致に近づけ、最後は手作業で微調整して「空海らしさ」を実現させたそうです。

再現された書は、書道研究家の監修で完成度にお墨付きを得たそうですが、今後は、形が似ているだけにとどまらない「人間らしさ」の表現が課題だと、記事は結んでいます。

確かに AI が身近になり、AI の再現物に興味を覚え、そこから書道文化に関心をもつことに繋がる可能性を否定はしませんが、歴史的書と AI 再現書の境が分からなくなってしまうことに怖さを覚えます。先ずは現存する書に直接触れてほしい、その筆遣いから伝わってくるその人物の生き様や心を、書と向き合うことで直に感じてほしいと思います。

昨夏の研修旅行に参加された先生方はその思いに共感していただけるはずです。AI と上手につきあいながらも、歴史的価値や伝統の重みを大切にできるこれからの日本人の心を育てる大切な使命を、先生方に担っていただきたいと切にお願いする次第です。

東海宿泊研修に参加して

慶應義塾中等部　松本　守

八月九日(水)、十日(木)の一泊二日の東海宿泊研修会に参加しました。初日の最後に犬山城を見学したときのこと。天守の傍らに巨大な石碑がありました。遠目からみても、一枚岩で平たく、しかもこの大きさにしては厚みがなく、むしろこの薄さでよく今までその姿を保てていたなという印象でした。幕末維新という激動の時期に城主を勤めた成瀬正肥を讃える顕彰した碑です。

でも、先生方はその石碑を正面から見るのではなく、背面に回っています。だれが見つけたのか、どうやら皆さんの視線の先には気になるものでもあるようです。その証拠にい

つのまにか一人また一人集まり、立ち話が始まっています。そのうち七～八人が集まり、自然と何かを共有する場ができていました。たとえていうならば、通りがかりの空き地で楽しそうにしている人たちを見つけて、自分もそれにつられてその輪の中に入っていつのまにかいっしょに遊んでいるといった感じでしょうか。幼い頃だれしも体験した光景を想像してください。

さて、先生方の視線は、石碑背面のちょうど中央部分に水平方向に割れ目が走っているのをとらえています。それを見て話題もさまざまです。「地震が起きればこの割れ目に沿って石碑が二つに折れてしまうのではないか」から始まり、書道に関する話に至るまで、一枚の岩（？）をきっかけに自由な視点で話が展開していきます。岩を観察して、だれかが気づいたことが次から次へと話題になっていくのです。もちろんだれも真実を知っているわけではないので見たまま感じたままの自分の感想を述べているのですが、なんだか皆さんと推理ゲームをしているようで、楽しい時間を過ごすことができました。やりとりの中には、ある参加者がかつて石碑から拓本をとった経験からの気づきもありました。

だれしも自分が体験したことをもとに、気づきや学びをもっていて、「？」を読み解くカギとして使うのではないでしょうか。そのカギの種類が多ければ多いほど自分が描くストーリーも多彩になります。そのストーリー中からテーマや課題に合うものを重ねて考えていく。目の前の「？」を読み解こうとする。そこにリアルな眼前のテーマや課題を重ねて考えてみる。考えたことを意見にしてみる。それをその場にいる人たちと共有する。互いに共感し疑似体験をしていく。こうして「木乃伊取りが木乃伊になる」になっていきます。未知の学びにつながる「正解のない問い」をテーマに考えた一場面でした。

今回の研修会では、たくさんの見学先がありどれも大変魅力的な内容でした。展示物を鑑賞したり実際に体験したりする中で参加者の意見交換をおこなうことに重点を置いていました。皆さんが感じたことを全員で大切にしていこうというマインドがあったと思います。

とりわけ校種の異なる先生方との交流が大変意義深いものだったと思います。互いの意見にじっくりと耳を傾ける要因の一つだったかもしれません。

研修に参加してしばらくたってふと次のようなことを考えていました。

ありふれたもの、ふだんは見ようとしないものの中に「？」を発見することで、そこに居合わせた人びとと学びの場を生み出すことができるかもしれない。このような場は、特別に用意しなくてもいつでもどこでも共有することができそうです。だれもが参加できる空き地みたいなものはないかなと考えています。

そして教員こそ自分で夢中になる体験、楽しめる時間をもつことが必要であると思いました。今回の研修は教員の空き地みたいなものだったと思っています。研修中に見た皆さんの生き生きとした表情がそれを物語っていました。

【１日目】

9:10　名古屋駅出発
9:40　徳川美術館・徳川園・蓬左文庫
12:30　道風記念館
　（移動中にバス内で昼食）
14:20　犬山城
17:30　緑風苑きよはる到着

【２日目】

7:00　朝食
8:35　緑風苑きよはる出発
8:45　高山陣屋
10:00　光ミュージアム
　（移動中にバス内で昼食）
13:50　美濃和紙の里会館で紙すき体験
15:15　美濃史料館ほか
17:30　名古屋駅到着・解散

「スタディーツアー」
深化する文房四宝の世界
実施のご報告

本研修会では、葛飾区「百八研齋」店主であり、文房清玩への造詣が非常に深く、多くの名品を蒐集研究しておられる渡邉久雄氏をお招きし、書に必要不可欠の道具である「文房四宝（筆墨硯紙）」に焦点を当てた研修を実施いたしました。

文房四宝の中には一般的に普段使われている道具ではなく、その道の歴史的名匠の手になるものや唯一無二の意匠を凝らした「文房清玩（文房古玩）」と呼ばれる名品の数々があります。

今回は写真での解説だけでなく、現存する名品の現物も交えながら解説いただき、その奥深い世界に触れ、書の魅力を道具の角度から深めました。

講師の渡邉氏は、約五十年に亘って書道用品店に勤務した経験を活かし、資料的価値の高い品々を所蔵し、更にそれらの紹介にも力を注がれております。今回の研修では道具を通して書の新たな魅力を発見できたのではないでしょうか。

令和五年度
芸術体育系教科研究会（書道）の歩み

○八月九日（水）～十日（木）
宿泊研修会
東海書道巡検
～日本文化と書の関わりについて考える～

一日目
・徳川美術館・徳川園・蓬左文庫
・道風記念館　解説付き見学
・バス内で意見交換
・犬山城
・旅館での振り返り

二日目
・高山陣屋
・光ミュージアム　解説付き見学
・バス内で意見交換
・美濃和紙の里会館　紙すき体験
・美濃史料館・あかりアート館

参加者　十一名

○令和六年一月二十六日（金）
スタディーツアー
深化する文房四宝の世界
講　師　「百八研齋」店主
　　渡邉　久雄氏
会　場　アルカディア市ヶ谷
参加者　二十二名

令和五年度
芸術体育系教科研究会（書道）委員

委　員　長　川上裕美子　東京音楽大学
委　　員　伊藤　恵子　跡見学園中高
委　　員　細井　重浩　目黒日本大学中高
委　　員　北原加枝子　和光中高
担当所員　板澤・岡沢・松田・今村

芸術体育系教科研究会
東京都千代田区九段北 4-2-25
私学会館別館 4 階
TEL:03-3263-0544
URL https://k.tokyoshigaku.com

2024.3 発行